龜谷行編

脩身兒訓

二

161
15
K110.1
99b
2

K110.1
99b

修身兒訓卷之二

龜谷行編

第一章　倫常

○人の實學たる。五倫上より做一起ることを要し。傳家寶

○凡そ天地父母主君聖人此恩へ。相並びて重し。此四恩を忘れ背く

を人にあらば。大和俗訓

○君に仕へては。忠を盡し私を忘れ。我が身を顧ること勿れ。初學訓

○父母に對しては。色を和げ氣を下し。溫和を主として事ふべし。家道訓

○父母長上教誡をるおとあらば。首を垂れて之を聽くべし。妄りに自ら議論を加へざるべし。朱子童蒙須知

第二章　交際

○人に交るるは厚きを旨とせよ。厚をとゝ人を責めずして。我を責むるなり。大和俗訓

○己を責むれば身修まる。人を責めざるべ恨みらるゝことなし。同上

○人城犯らさるることを易く。人乃我を犯せざるを難し。同上

○人の心を知りて後交る可し。知らざるを友とすれば後悔あり大和俗訓

○西諺に曰く。交る友を見て其人品を識る。

○高尚なる品行の人と共に居れば。其身を高處に引き上げらるゝを覺ゆ。品行論

○善人を見て之に效ひ。不善人を見て之を改む。善と不善と。皆吾が師なり。傳家寶

○西諺に曰く。惡人より愛せらる

故に。惡まるゝよ至危し。

○誇るゝことを休よ。我能く人に勝ふ。我に勝る者もまゝ多し。傳家寶

○他人の長短を論ぜんと欲せざ。先づ自己が長短如何を顧よ。願體集

○人を害する心を有るべからず。人を防ぐの心い無ざるべからず。

同上

○陸宣公曰く。寧ろ人の我に負くとも。我を人に負くことなかれ。

○貧極りて儉約せざる人は。親を交ふるこの理ぜ。願體集

○富でい貧き者を忘ぜ。貴くして賤き者を侮らず。初學訓

○富む時親まず。貧き時疎ぜざるを。眞乃大丈夫なり。富を時進を。貧を時退くは。眞に小人なり。願體集

○程子曰く。富貴ゆへて人ゆ驕る。固より善からず。學問して人ゆ驕る。害も亦細ならず。

○不肖を以て人を待つ。愚者や雖を甘ぜず。非禮我以て人を處す。賤者と雖も亦怨む。習是編

○西諺ゆ曰く。無益の爭論を勝て益なく。負るゆ益あり。

○スコルース曰く。自其身を恭敬をぜる者を。他人より恭敬我受くることを能をず。

○人と約せむ。信を失ふと勿れ。一度信を失ふ。人ハ非ぞと思ふべし。大和俗訓

○若し其事。義ハ協ハず。或ハ力及ばざるハ。始より約を結ぶ勿れ。同上

○省心錄ハ曰く。和ければ仇なく。恐

魯廟欹器

べべ辱あり。

○徑路窄き處を過きむ。須らく一歩を讓りて。先づ人を通ぜ。願體集

○西諺ハ曰く。友の爲めに勞を辭

ば。友乃情ハ増セ。

○良友ハ吾身の寶庫なり。若し之を得んと欲すべ。惠愛信義を以て人と交るべし。勸懲雜話

第三章　言語

○人ハ過ち。吾が心ホ之を知るも。妄ニホ口ホ出セ事ハ慎しむ。大和俗訓

○人を誹ふハ不仁なり。且吾ハ於て益なし。人を誹ふ之を聞ハ。甚だ害あり。同上

○人ハ譏ルべ。人又吾を譏る。人を誹ふハ。即ち自ら誹るなり。同上

○君子ハ。人乃善を揚げて人の惡を隱くし。人ハ長ずる所を取り。短

き所ならば。同上

○口を開きて人を誚るは。第一の輕薄なり。唯德を失ふのみならば。亦我が身を失ふ。傳家寶

○只己れの是を說くは。其心粗ふして。其氣浮ぶれなり。同上

○鄕里人物の長短を論じ。鄙俚無益の談を爲すこと勿れ。五種遺規

○佐藤一齋曰く。凡そ人を語ふは。彼をして其所長を說くしむべし。我ふ於て益なり。

○前人の長短を說くは。勿れ。自家乃背後の眼あり。小兒語

○孔子曰く。人乃惡を稱する者は

惡し。下流に居て上を訕る者を惡む。

○子貢曰く。是の邑に居て其の大夫賢なるを事へ。其の士の仁なるを友とす。

○荀子曰く。人を傷るの言は矛戟よりも甚し。況や紙筆に形るをや。

○人の過を諫むるに誠あまり有て。辭足らざるを善とす。大和俗訓

○世に虛言多し。虛言は信じ難く人を語るべ。吾も亦虛言の責を免れざる。同上

○喜ぶ時は言を多く信を失ひ。怒る時の言を多く體を失ふ。傳家寶

第四章　學問　立志

○禮記に曰く。玉琢らざれば器を成さず。人學ばざれば道を知らず。

○孔子曰く。朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。

○光武曰く。志ある者は事竟に成る。

○傳家寶に曰く。男子志なくば。鈍鐵の鋼なきが如し。

○佐藤一齋曰く。志を立てるの功は。恥を知るを以て要とす。

○荀子曰く。其人とあるや。暇の日多けれども。人にまさること遠からじ。

○顔之推曰く。光陰を惜む事。諸

をを逝水ゝ譬ふ。

○西諺ゝ曰く今日此後ゝ今日ゝ

し。又曰く。今日乃一時を。明日の二

時よりも貴し。

○程伊川曰を。學ぶ者を必ず師を

求む。師我求ゆるこを。慎まざるべ

からぞ。

○道を教ふる此師を。其恩尤重し。

君父と同じく貴ぶべし。初學訓

○技藝の師を。亦我ゝ恩あり。敬重

きざるべからず。同上

○良田萬頃も。一藝の身ゝ在るゝ

ハ如からぞ。願體集

第五章　儉約　安分

○管子曰く。人情を以て侈なれば貧し。力めて儉なれば富む。

○倍根曰く。節儉の要道は。小利に意を注んよりハ。寧ろ小費を省くに如くべし。

○スマイルス曰く。節儉は。家事を治むるに精神なり。

○戎孫曰く。儉約は。安静の基礎なるのみならず。又仁恵に根源なり。

○分に過ぎて。福を求ぬれば。却て禍伐を招く。傳家寶

讀書百遍義自見

○分不安ど。禍は遠ざくべ。自ら福を得べし。同上

○足ることを知る者は。身貧しくも貴きを心富む。得ふ所を貪る者は。身富めども心貧し。同上

○禮記に曰く。志は滿ぶるを好まず。樂は極むべからず。

第六章　生業

○朝早く起くるは。家の榮ゆる兆なり。晩く起くるは。家の衰ふる基なり。大和俗訓

○リットン曰く。金錢は人の品行に關せ。金錢乃事は。決して輕率にすること勿れ。

○富爾拉曰く。正經の職業を有つ人は。卑賤を愧づること勿れ。有たざる人は恥ぢべけれ。

○西語に曰く。金を借りに往く者は。憂を取りに往く者なり。

○西諺に曰く。利子を取んよりは。利子を出すこと勿れ。

○古語に曰く。勤めは貧きに勝ち。慎ミは禍に勝つ。

○西諺に曰く。狡猾にて財を得るは。名望を失ふ。

○又曰く。愚者は妄りに財を貯へ。智者は適宜に財を用ゐる。

○古語に曰く。廉士は財を愛さざ

るゝ非ず。之を取ること道ゝ由ゝ。

○一日の飯我喫せざ。一日乃飯錢を得るゝ事を計るべし。必ず虛しく費すこと勿れ。願體集

○佐藤一齋曰く。信を人ゝ取るべ。財の足らざるこを患なし。

第七章　改過

○孔子曰く。過てゝ。改むるゝ憚ることなかれ。

○又曰く。過て改めざる。是を過と謂ふ。

○左傳ゝ曰く。人誰ゝ過なからん。過て能く改れば。善事より大ゝなる無し。

○西諺に曰く。歡樂は少き時より己れの過を知る者なり。

○韓退之曰く。人其過を知らざるを患ふ。既に之を知りて。改むること能はざるを患ふ。是れ勇なき也。

○西諺に曰く。少き時の過失は。老て後に悔とする。

○陸桴亭曰く。過を改むる乃人なり。天氣の新に晴るゝが如し。我自ら快し。人之を見るも亦喜ぶべし。

第八章　躬行

○凡そ一念惡を思ひ。一事惡を行へば。天道に背く。恐るべし。初學訓

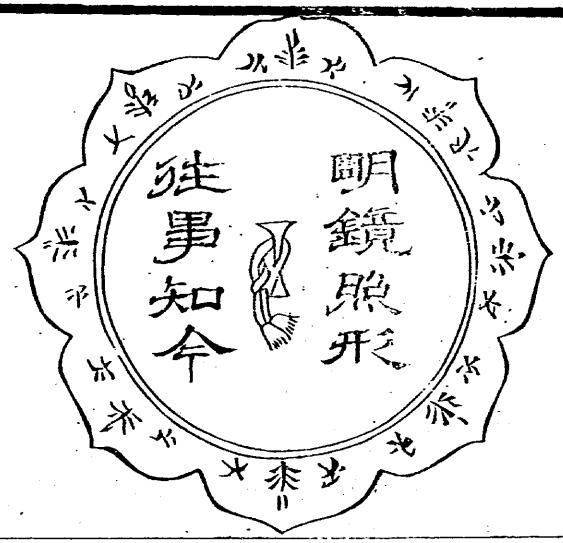
○善を爲すことは易く。善を行ひ。

其名を求めざるい難し。是誠に善なり。大和俗訓

○信を心に誠あるなり。心にて生じれば言行の上にあらはる。五常訓

○人乃心信實なるは萬事の基なり。人に交るに道なり。同上

○若し信なければ何ぞ萬事都て偽り



なり。人に交りて何如ぞ善らるべき。同上

○薛文清曰く。人を感ぜ志むる能はざるい。皆誠乃未だ至らざる也。

○善を小ぶして益なしと謂ふ勿れ。不善ハ小ぶして傷を成すと謂ふ勿れ。賈誼新書

○西諺ニ曰く。一身に品行を。其危難を防ぐこと。一隊の兵馬よりも勝れり。

○スマイルス曰く。人の此世に在る。真正の權勢と稱すべき者も。品行なり。

○薛文清曰く。日用の間。纖毫の事も皆當さに謹慎すべし。

○鹵莽ニして煩戎厭ふ者を。決して成るの理なし。呂氏童蒙訓

○費元祿曰く。能く煩に耐へバ。天

下何事ゝ為そべゝらざらん。

○西語ゝ曰く。出るとたゝ為べき大とを思ひ。歸るやきた爲たること

や戔思へ。

○人驕きバ志昏し。志昏きバ計短し。傳家寶

○名を成そゝ。毎ゝ窮苦の日ゝ在り。事を敗るゝ。多く得意ゝ時ゝ因ゝ。同上

○錢あらば。常ゝ錢ゝきの日を想へ。安樂なゝで常ゝ病患ゝ時を思へ。同上

○西諺ゝ曰く。悅樂そ。勉强ゝ因て得る所乃賞典なり。

○セシル曰く。多くの事を為され捷徑ハ他なし。即時ニ一事を為さなり。

○西語ニ曰く。真正の事業ハ工夫我用ゐる比勇みるニ非ずんば。得べからず。

○古語ニ曰く。莫大ハ禍ハ。須臾の忍びざるニ起ふ。

○孔子曰く。人遠き慮りなけれバ。必ず近き憂あり。

○一言ハ過も。莫大の禍となり。一事の失を終身の憂とする。慎まざるべからず。大和俗訓

○西諺ニ曰く。一年善ならざれば。

七年の憂を招く。

○魏環溪曰く。世間第一敬すべ
の人と。忠臣孝子なり。世間第一憐
むべきの人は寡婦孤児なり。

○人乃聞ことなき事を欲せず。
言ふこと勿れ。人の知ることなき
ことを欲をば。爲すこと勿れ。顧體藁

○陸桴亭曰く。天下何事か怒りふ
因て錯らざらん。怒れば性し。性し
け怒で錯る

○程漢舒曰く。人乃錯まる處を見
てハ。時々我身を返り觀るべし。

○君子は人を勸めて。訟を息めた
め。小人は人を激して。訟を起さし

む。願體集

○身を終るまで路を讓るべき。百歩を枉げて身を終るまで畔を讓れども一段を失はず。同上

修身兒訓巻之二終

明治十三年十一月廿五日版權免許
同　十四年十二月廿一日出版
同　十五年五月廿一日再版

東京府士族光風社長
編者出板　亀谷行

亀谷省軒閲
修身兒訓字引
右八類本アリ亀谷校閲ヲ以テ真本トス

東京下谷御徒町二丁目六十七番地
柳原喜兵衛
大坂北久太郎町
牧野善兵衛
東京芝口二丁目
吉川半七
同　南傳馬町二丁目
石川治兵衛
同　馬喰町二丁目

發兌

定價七錢

龜谷行編

脩身兒訓

三

K110.1
31
3